

静かなる刑事

笹沢左保

テレビ

警

視

庁



徳間文庫

徳間文庫



デカ
刑事
しずかなる

© Saho Sasazawa 1999

1999年6月15日 初刷

著者 笹沢 左保

発行者 徳間 康快

東京都港区東新橋一丁目105-8055

発行所 株式会社 徳間書店

電話(〇三)三五七三・〇一一(大代)

振替 〇〇一四〇一〇一四四三九二

印刷 凸版印刷株式会社

編集担当 竹内秀郎／販売担当 斎藤博幸・宇都宮昭治

ISBN4-19-891116-9 (乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

徳 間 文 庫

静かなる刑事^デ^カ

笹 沢 左 保

徳 間 書 店

目次

手にはない指紋	5
肝臓の不安	55
偶然という恐怖	104
赤色の証言	155
白昼の空白 ブランク	205

手にはない指紋——落としの名人・尾花警部補

1

久我山警察署の防犯課に搜索願が持ち込まれたのは、十月二十一日の午前九時であった。午前九時に警察を訪れるというのは、依頼人がかなり精神的に追いつめられている証拠である。

行方不明者は紺野千代美、二十四歳で、大手の食品会社の東京本社に勤務している。住所は、杉並区宮前のジョイ・ホウム33号室となっていた。

ジョイ・ホウムは六階建ての賃貸マンションで、各室とも独身者向きの2Kであった。紺野千代美も独身で、ジョイ・ホウムの三階33号室にひとりで住んでいた。

久我山署に搜索願を提出したのは紺野陽子で、千代美の四十九歳になる母親だった。千代美には二人の弟妹がいて、紺野家の長女ということになる。

紺野家は、同じ杉並区内の堀ノ内にあった。千代美は厳格な父親への反撥と、意見の衝突に耐えられなくなり独立を宣言した。千代美は昨年の八月に堀ノ内の家を出て、宮前のマンションへ移り住んだ。

だが、独立したものの、自立にはならなかった。千代美の給料だけでは、とても生活できない。千代美は当然、父親の援助を仰ぐことになる。

自営業ということで、紺野家には経済的な余裕があった。そのことに、千代美は甘えたのだ。千代美の銀行口座に毎月、母親の陽子が一定の金額を振り込んだ。

「お父さんも、娘さんへの仕送りを認めていたんですね」

防犯課の係官が、陽子に質問した。

「はい。千代美が独立すると言いつ出した時点で、主人はすっかり諦めたようでした。むしろこれ以上、千代美を心理的に圧迫するのはまずいからと、主人は氣遣っておりました。それで千代美への送金にしても、主人は黙認することになったんです」

紺野陽子は、そのように説明した。

「すると最近のお父さんと娘さんの仲は、少しも険悪ではなかったということになりますね」
父親との折り合いが悪くて娘が姿をくまますということも、決して珍しくない例だと防犯課の係官は考えたのだった。

「この一年と二カ月、主人と千代美はまだ顔は合わしておりませんが、電話では何度かお喋りしゃべしています。電話では、穏やかなやりとりでした」

紺野陽子は、暗い目つきで答えた。

「お母さんは娘さんのマンションに、ちよくちよく出入りされていたんですね」

「はい、週に一度は必ず……。それに電話は一日置きに、かけたりかけたりでした。千代美はもともと明るい性格なんですけど、いつも元気な電話でした」

「最後の電話は……」

「十月十五日の夜でした。千代美のほうから、電話をくれたんです。そのときも笑ってばかりいて、とても楽しそうな千代美でした。今度の土曜と日曜に会社のグループで、伊香保温泉へ行くんだって千代美は声を弾ませておりました」

「それで、お母さんがジョイ・ホウムへ行かれたのは、いつになるんですか」

「二日後の十月十七日の午後、出向きました。いつものように合鍵あいかぎで、ドアをあけようとしたんですけど……」

「33号室のドアには、鍵がかかっていなかったんですね」

「はい。きつと鍵をかけ忘れたんだと思いますながら、部屋の中へはいったんですけど、もちろん千代美はおりませんでした」

「室内には特別、異常がなかった」

「はい。いつものように、きちんとしておりました。荒されているとか、何かが倒れているとか、そんな様子はまるでありません。ただ……」

「ただ、何ですか」

「いつもと違って、ベッドが乱れたままでした」

「どんなふうに、乱れていたんです」

「ベッドカバーがずれたりめくれたりで、あちこちに皺しわが寄っているという状態でした。それで千代美はベッドにはいらずに、ベッドカバーのうえで寝たんだるかとも考えました」

「なるほど」

「そういうことでしたので念のため、千代美の部屋から会社へ電話をかけたんです。そうしたら、今日は無断欠勤しているということでした……」

「無断欠勤したのは、その日だけだったんですね」

「はい。前日の十六日までは、何ひとつ変わったこともなく、ちゃんと出勤していたそうです」

「千代美さんはそれっきり、会社にも出勤しないしマンションへも戻ってこない」

「はい」

「十月十六日の夕方に会社を出てから、消息を絶ったということですか」

「いいえ十月十六日にしても、千代美はマンションへ帰って来ているんです。十月十六日の午後六時すぎに帰宅して、33号室のドアの鍵をあげようとしている千代美を、32号室に住んでいらつしやる女性が見かけたんだそうです」

「すると、千代美さんを最後に見ているのは、ジョイ・ハウムの32号室の住人ってことですか」

「そうだと思います」

「つまり千代美さんは、十月十六日午後六時すぎ以降の夜間に、失^{しつそう}踪した可能性が強いわけですね」

「千代美が失踪したり、姿を消したりする理由はありません。ですから何らかの事情があつて、どこかにいるんじゃないかと、毎日ずっとあの子からの連絡を待ちました。千代美のお友達、立ち寄りそうな親戚^{しんせき}には、残らず問い合わせました。ですけど、すべて無駄だったんです」

「そうしているうちに、四日間がすぎてしまった」

「はい。昨夜、わたしどもの考えが甘いのではないのか、事態はもつと深刻でとんでもないことが起きたのかもしれないと、主人と話し合いました……」

紺野陽子は、目を赤くしていた。

「今日の早いうちに、ここへ見えられたんですね」

防犯課の係官は子どもをなだめるように、できるだけ声と口調をやさしくした。

「わたしどもとしては、万策尽きました。あとはもう、警察にお任せするほかはありません」
紺野陽子はハンカチで、憔悴^{しやうすい}しきった顔を覆った。

久我山署の防犯課は、搜索願を受理した。それも、単なる家出人の扱いにはしなかった。紺野千代美は何らかの事件、あるいは事故に巻き込まれた可能性があると判断したからだった。防犯課ではいちおう警視庁捜査一課に速報したうえで、同じ久我山署の刑事課捜査一係に協力を求めた。直ちに防犯課と刑事課捜査一係とで、合同の会議を開く。その会議の結論が出るまでに、さして時間はかからなかった。

1 紺野千代美は、伊香保温泉への旅行を楽しみにしていた。十月十五日の夜、母親にかけた電話でも千代美はいつもと変わらず屈託がなかった。会社の同僚、友人なども千代美から苦悩や苦勞を、打ち明けられていない。したがって、みずからの意思による失踪、あるいは自殺の理由が認められない。

2 千代美は、独り暮らしをしているので、家出する意味がない。

3 十月十六日午後六時すぎの帰宅を隣室の住人に目撃されたあと、千代美は忽然^{こつぜん}と姿を消している。誰にも連絡^{だれ}せずに、翌十七日から勤務先も無断欠勤している。

4 友人、知人、親戚宅などに、いっさい立ち寄っていない。

5 十月十七日の午後二時ごろに、母親がジョイ・ハウムの33号室を訪れたとき、ドアに鍵がかかっていなかった。

6 室内は荒されていなかったが、ベッドのカバーに乱れが認められた。

7 母親の記憶によると、千代美が気に入っていたローズピンクのスーツが見当たらないという。

8 これも母親の記憶として定かではないが、千代美の靴などの履物類は全部そろっているようだという。

以上のような諸点の分析により、千代美は何らかの事件に巻き込まれただけではなく、最悪の事態も想定されるといふ結論が出されたのだ。それで、捜査二係も含めた刑事課全員の出勤となった。

捜査一係のメンバーはジョイ・ハウム33号室の捜査、付近の聞き込み、千代美の交友関係の洗い出しを担当する。ジョイ・ハウム33号室の捜査には、鑑識も加わった。

それを応援する捜査二係の刑事たちは、千代美の母親の証言の裏付けと、家族からの事情聴取に散った。そうした捜査は三日間に及び、それなりの収穫を得た。

1 十月十六日に千代美は、ローズピンクのスーツに同系色のヒールをはいて出勤したと、会社の同僚多数の証言があった。

2 ジョイ・ホウム32号室の住人も、帰宅した千代美がローズピンクのスーツに同系色のヒールをはいていたと証言した。

3 33号室から、ローズピンクのスーツは発見されなかった。

4 同系色のヒールは、33号室の入口の踏み込みに脱いだままになっていた。

5 当日、千代美が持ち歩いたと思われる黒いバッグは、居間として使われている六畳間のテーブルの下にあった。

6 バッグの中には、財布、預金通帳、印鑑、入口ドアの鍵などがはいつていた。

7 預金通帳によると十月五日以降、一円も引き出されていない。

8 六畳間の寝室のセミダブルのベッドには、母親がベッドメイキングをしたとのことで、カバールの乱れなどは認められなかった。しかし、ベッドの下から眼鏡のレンズが、一枚だけ発見された。

9 十月十七日の午後二時ごろに母親が室内へはいったときは、居間のテーブルのうえに茶器、コップ、グラス、灰皿などはいっさい見当たらず、来客があったふうには感じられなかったという。

10 室内から、かなりの量の指紋を採取することができた。

11 十月十七日の午前一時ごろ、ジョイ・ハウムの駐車場より普通乗用車がそろそろと発進するのを、マンシヨンの住人がトイレの窓から見ている。ただし、白っぽい普通乗用車というだけで、車の型とかナンバーとかは不明。

12 千代美の交友関係の洗い出しでは、ジョイ・ハウムの33号室に出入りしていた男三人、女三人が浮かび上がった。

13 男三人とは勤務先の上司、この夏ごろから結婚を前提として交際中の病院の医局員、それに一年前から付き合いのあるボーイフレンド。

14 女二人は勤務先の同僚、もうひとりとは千代美の短大時代からの友人。

これだけの収穫があったので、あとの捜査は捜査一係のメンバーが受け持つことになる。事件は防犯課の手を離れ、捜査二係も応援の任務を解かれた。

まだ殺人事件と決まったわけではないので、本庁捜査一課の強行犯担当も乗り出してくることはない。久我山署刑事課捜査一係に、捜査のすべてが任される。

「最悪だね」

捜査一係の尾花警部補が、席についたままで自分の頭を殴りつけるようにした。

尾花警部補は大男なので、髪の毛を短く刈り込んでいるせいもあって顔が小さく見える。その代わり八十キロの体重が、身動きしただけでも椅子を軋らせる。

「殺しつてことですか」

隣りの席の津田刑事は、何となく釈然としない面持ちでいた。

津田刑事は心から、尾花警部補を尊敬している。だが、津田刑事はまだ若いせいか、尾花警部補が断定的な言い方をする^{はんぱつ}と反撥を感じるらしい。

「ほかに、考えようがないよ」

尾花警部補は、ニッと笑った。

この四十五歳の警部補は、なぜか色が白い。日焼けしない性質なのか、四季を通じて娘のように白い肌をしている。夏の炎天下を歩き回ろうと、顔や腕がピンク色に染まる程度である。

それも間もなく消えてしまつて、元の色の白さに戻る。そのことは、久我山署の七不思議のひとつにされていた。笑うと柔和な童顔が、赤ん坊のように可愛らしい。そのために尾花警部補のニックネームは、『キューピーちゃん』となっている。

「拉致されたつてことで、何とかありませんか」

若い津田刑事のほうが、はるかに精悍な顔つきであつた。

「そう願いたい、まず無理だろうな」

尾花警部補は、大きな目を、一回転させた。

2

誘拐^{ゆうかい}ではないということは、はっきりしている。

紺野千代美が行方不明になって、すでに九日間が経過していた。しかし、誘拐をほのめかすような連絡も、脅迫電話もまったくないのである。

誘拐犯が九日間も、沈黙を守っているはずはない。それに、一人前の成人を何日も誘拐監禁しておくのは、非常に困難なことであった。

身代金目当ての誘拐でも単純誘拐でもないということで、紺野千代美の行方不明の報道も解禁になっている。誘拐ではないとなると、ほかに千代美を拉致する理由がない。

「殺しとなると、犯行現場はジョイ・ハウムの33号室ですか」

伊豆部長刑事が、口を挟んだ。

「間違いない」

尾花警部補は、正面の伊豆刑事に目をやった。

「紺野千代美はローズピンクのスーツを着て、同じ色のヒールをはいて勤務先から帰って来た。